

第2章 中心市街地の現状

(1) 本市の成り立ちと特色

①沿革

『400年の歴史がある城下町』

弘前のまちの歴史は、戦国時代の津軽氏の台頭に始まります。津軽の統一を果たした津軽為信が、当時高岡と呼ばれていたこの地で築城を計画した後、弘前藩2代藩主津軽信枚(のぶひら)によって慶長16年(1611)弘前城が完成し、近世城下町弘前が誕生しました。その後、明治維新までの約260年間にわたり、一度も戦場となることなく、また、幕命による国替えも経験せず、弘前藩10万石の城下町として津軽の政治・経済・文化の中心となりました。



旧弘前市は、明治22年4月1日に全国31市の一つとして県下で最初の市制を施行し、同27年の青森～弘前間の鉄道開通に続き、同31年には陸軍第八師団司令部が設けられ軍都としての歩みを続けますが、大正10年に官立弘前高等学校が開校し、学都としての性格も加わりました。

昭和初期には都市機能が備わった旧城下町と、周辺農村部の一部合併で市域を広げ、発展を遂げました。そして、昭和30年には中津軽郡11村、同32年には南津軽郡石川町と合併し、更に平成18年2月27日には、隣接する岩木町・相馬村との合併により、人口が約19万人、面積が約523km²の新弘前市が誕生しました。

②自然・文化・産業

『弘前のキーワードは「白神山地」「弘前城」「ねぶた」「りんご』

当市は、東に八甲田連峰を望み、西に津軽の霊峰岩木山を有し、南には世界自然遺産の白神山地が連なっており、これらがもたらす自然的資源のほか、江戸時代以降受け継がれてきた歴史的資源が豊富に存在することが特徴として挙げられます。

観光面においては、日本一の桜の名所である弘前公園をはじめ、江戸時代のたたずまいを残す寺院街など伝統的建築物などが存在する一方で、明治・大正期の洋風建築などの歴史的文化財も数多く有しています。さらには、「弘前さくらまつり」、「弘前ねぶたまつり」、「弘前城菊と紅葉まつり」及び「弘前城雪燈籠まつり」に代表される津軽の四季を活かしたまつりが催され、毎年多くの観光客で賑わっています。

また、基幹産業である農業は、米はもとより、日本一の生産量を誇る「りんご」や岩木山麓の「嶽きみ(とうもろこし)」など、全国的に有名な作物が多数あります。

その他、国立大学法人弘前大学など高等教育機関が中心市街地を中心に集積しており、「学都弘前」と称される学園都市が形成されています。高等教育機関は知的資源としての存在だけではなく、学生・教職員合わせて約12,000人を有していることも含め、社会的・経済的な効果をもたらしており、当市の特色の1つとなっています。

③都市構造

『都市部を中心に、周辺は農村部、さらに北西から南側は山間部が広がる都市構造』

当市の都市空間の基本的な成り立ち(都市構造)は、市の東側に位置する都市部、その外周に広がる水田、りんご園といった広大な農地と、これを維持する農業集落が点在する農村部、さらに北西側から南側にかけての山間部に分けることができます。

都市部では、様々な都市機能が集積する中心部と地域コミュニティを育むいくつかの住宅地のまとまりが形成されています。

農村部においては、人口減少と高齢化の進展が加速しています。

都市部から農村部、山間部の白神山地や岩木山には、県道などの放射状道路網が整備され、公共交通はバスが利用されています。



(2) 中心市街地の形成と概況

当市の市街地は、約400年前に築かれた城下町の町割りを原型として形づくられています。特に、旧城下町の区域は、自然地形を巧みに取り込みながら計画的に建設されており、道路網や町割り、あるいは今日の歴史資源となっている多くの社寺の配置なども含めて、当市の都市個性を印象づけています。

この城下町の区域をベースに、明治27年の奥羽本線開通(青森～弘前間)により現在のJ R弘前駅に向かって市街地が拡大し、明治31年の陸軍第八師団司令部設置による軍施設が整備されたことにより南部に市街地が拡大しました。

昭和40年以降は、土地区画整理事業等による計画的な宅地開発が進み、土手町を中心とした半径2.5kmの範囲にまとまりのある市街地が形成されています。特に、弘前公園からJ R弘前駅前までの中心市街地は、多様な機能が集積しています。

弘前公園周辺は、官公庁や公共公益施設、観光施設等が多く集積しているほか、国の重要文化財をはじめ多くの観光資源を有し、当市独自の景観が形成されています。

土手町地区は参勤交代時の奥州街道に通じる道筋として町家が形成され、古くから商業が栄えました。明治以降は商店街として更に集客力を増し、商店街近代化事業等により部分的に商業施設の近代化を図ってきました。その後、車社会を背景とした郊外のロードサイドショップやショッピングセンター(S C)の増加により、大型店舗の移転や民事再生手続き、小売店舗の廃業が続き衰退傾向にありましたが、土手町コミュニティパークの整備等を契機として空き店舗の減少も緩和されてきています。

J R弘前駅前地区は、明治以降、奥羽本線の開通により市街地が拡大した地域であり、周辺市町村の広域交通結節点としての機能を持っています。また、平成25年に弘前駅前地区再開発ビル「ヒロロ」がオープンし、現在弘前駅前北地区において土地区画整理事業が進められているなど、今後も津軽地域の交通機能、商業機能、居住機能の役割を担う地区として発展が期待されています。

(3) 中心市街地の既存資源

・ 歴史的・文化的資源の状況

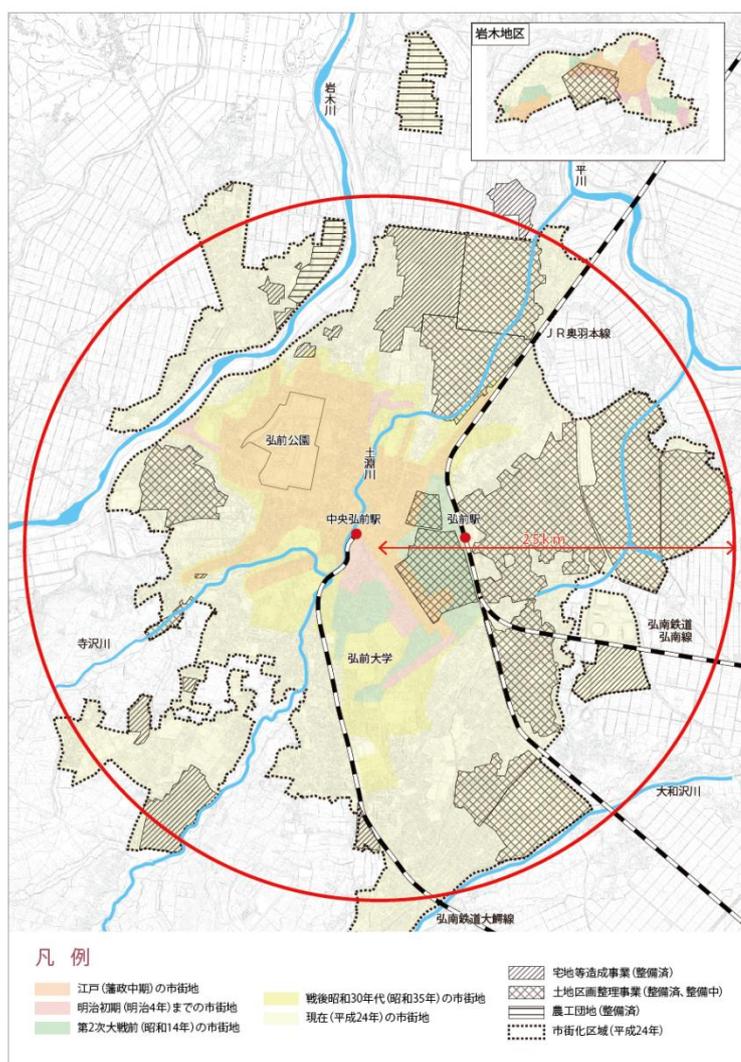
慶長16年(1611年)に弘前藩2代藩主津軽信枚(のぶひら)によって弘前城が築城され、現在の城下町は、その弘前城を中心として形成されています。当市は、幸いにも戦災に遭わなかったことから、歴史的建築物が今もなお多数残っています。

中心市街地の北側には、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている「仲町伝統的建造物群保存地区」があり、武士住居遺構が旧姿を残し、道路境及び敷地境のサワラ垣は黒塗りの薬医門と合わせて侍町の風情をとどめています。

西側には、津軽家の菩提寺である「長勝寺」を中心とした全国的にも希な曹洞宗の33の寺院が建ち並ぶ「禅林街」をはじめ、「新寺町」と呼ばれる寺院街や「最勝院五重塔」(国の重要文化財に指定)があり、江戸時代の趣が残っています。

当市は江戸時代の建造物が現存している一方で、明治・大正時代の洋風建築物も各所に残っているという特徴をもっています。代表的なものとしては、旧第五十九銀行本店本館、日本基督教団弘前教会教会堂、弘前学院外人宣教師館、旧弘前市立図書館などがあり、なかには建物内部に津軽地域の伝統的な技法を用いた建物もあります。また、日本を代表する建築家である前川國男が設計した建造物が多数現存していることでも有名であり、これらを見学に訪れる人も年々増加し、他都市にはない様々なジャンルの建築物が中心市街地には集積されています。

また、石坂洋次郎、葛西善蔵など当地出身の作家や著名人が多く、弘前をモチーフに描かれた作品も数多く存在しており、市内には、ゆかりある人々の句碑や歌碑が建てられています。



■文化財等の立地状況

中心市街地



弘前城天守



日本基督教団弘前教会教会堂



旧第五十九銀行本店本館



旧弘前市立図書館



長勝寺三門



最勝院五重塔

国重要文化財	市指定文化財
● 神社・仏閣等	● 神社・仏閣等
⊙ 洋風建築物	⊙ 洋風建築物
○ 登録有形文化財	
県重宝	
● 神社・仏閣等	● 前川國男設計建築
⊙ 洋風建築物	⊙ 文学碑

・まつり

当市では四季を通じて多様なまつりが行われています。約2,600本の桜を有し、日本の桜の名所とよばれる弘前公園で行われる「弘前さくらまつり」や、夏に行われる勇壮華麗な「弘前ねぷたまつり」は毎年多くの観光客で賑わっています。秋は見事な菊と鮮やかな紅葉に彩られた「弘前城菊と紅葉まつり」、冬は幻想的で詩情豊かな「弘前城雪燈籠まつり」があります。特に「弘前ねぷたまつり」は、中心市街地を運行コースとした歴史ある市民参加型のまつりであり、長年にわたり市民に親しまれています。

また、近年、中心市街地の商店街を舞台としたまつり・イベントが開催されています。6月にはよさこい津軽、7月には百石町納涼夜店まつり、8月には駅前サマーフェスタ、9月にはカルチュアロード、10月にはりんごハロウィンなど商工会議所や商店街、町会が連携した特徴的なイベントが数多くあります。



弘前さくらまつり



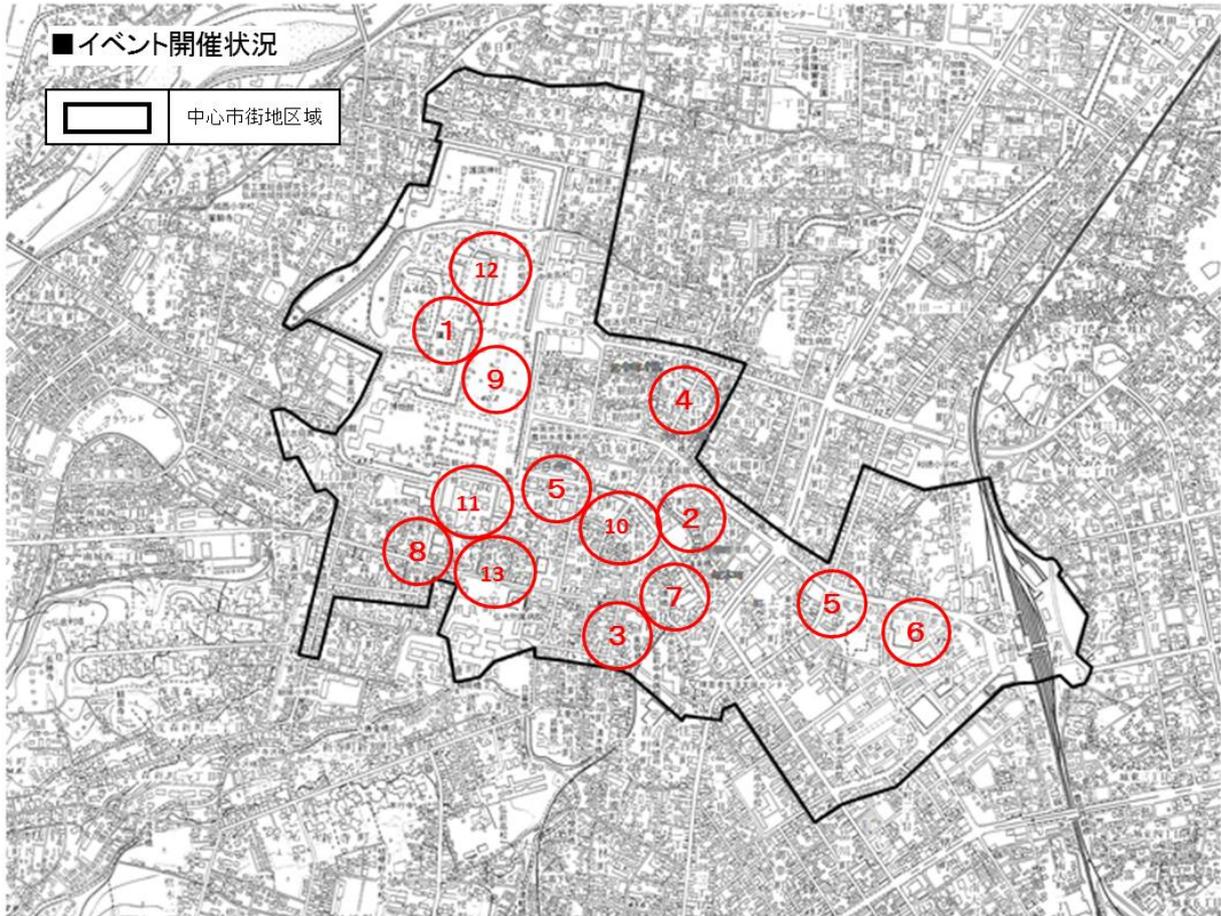
弘前ねぶたまつり



弘前城菊と紅葉まつり



弘前城雪燈籠まつり



イベント名	期間	イベント名	期間
①弘前さくらまつり	4月下旬~5月上旬	⑧弘前・白神アップルマラソン	10月上旬
②よさこい津軽	6月下旬	⑨弘前城菊と紅葉まつり	10月中旬~11月上旬
③弘南鉄道納涼ビール列車	7月	⑩りんごハロウィン	10月中旬
④百石町納涼夜店まつり	7月下旬	⑪エレクトリカルファンタジー	12月~2月
⑤弘前ねぶたまつり	8/1~8/7	⑫弘前城雪燈籠まつり	2月上旬
⑥駅前サマーフェスタ	8月下旬	⑬追手門広場フリスタイルマーケット	通年
⑦土手町カルチャロード	9月中旬		